よみがえる万葉人

永井路子

文春文庫

よみがえる万葉人

定価はカバーに
表示してあります

1993年8月10日　第1刷

著　者　永井路子
発行者　堤　　堯
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-720029-5

よみがえる万葉人

永井路子

よみがえる万葉人　目次

『万葉集』は愛からはじまる

愛とヤキモチ事始――磐姫　9
恋の女王、但馬皇女の贈り物　16
雪の日の挽歌――穂積皇子　22
引き裂かれた二人――中臣宅守・狭野弟上娘子　28

近江・飛鳥の明暗

紫の謎めく女人――額田王　37
風雲をはらむ名歌――天智天皇　43
ナンバー2タイプの大もの――天武天皇　49
大忠臣の恋愛賛歌――藤原鎌足　55
白鳥の皇子――有間皇子　62
女帝サマはお腹立ち　68
ヒーローの不運――大津皇子　75
二上山哀傷――大伯皇女　81
恋に敗れた草壁皇子　87

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私はだァれ？——石川郎女　92

よみがえったプリンスの周辺

話題の人物・劇的に登場——長屋王　101
元明女帝サマは中継ぎか　110
誤解されている美貌の女帝——元正天皇　117
天平のトップ・カップル——聖武天皇と光明皇后　123
忘れられた皇子？——石川広成　129

「大伴山脈」の風景

飲んべエ大伴卿に乾杯　137
マダムは御多忙——大伴坂上郎女　149
天平の風見鶏——大伴家持　161
ウマのあったインテリ部下——大伴池主　182
平凡人をお忘れなく——大原今城　188
悲しい防人たち　193

奈良の都は揺れやまず

タナボタ総理とあじさい——橘諸兄　201

政界ジュニアともみじ——橘奈良麻呂　207
なでしこの代償——丹比国人　213
「杖下に死」した廃太子——道祖王　219
密告者とその兄弟たち——山背王・安宿王　224
寵臣は灰色——藤原仲麻呂　230
寵臣一族の末路——執弓、久須麻呂　235

詩魂の世界

静寂の人へ質問——山部赤人　243
天平の大インテリ——山上憶良　249
無常をうたう——沙弥満誓　255
心やさしき伝説歌人——高橋虫麻呂　260
筑紫のひぐらし・その重み　270
風土や歴史息づく東歌　275
詩人プリンスの系譜——志貴皇子とその一族　281
渡来人たちは歌う　299
よみがえりすぎた？——人麻呂　305
あとがき　317

単行本　一九九〇年六月　読売新聞社刊

『万葉集』は愛からはじまる

愛とヤキモチ事始——磐姫

『万葉集』の中で、最も古い歌は巻二の巻頭にある仁徳天皇の皇后、磐姫（磐之媛とも書く）の歌、ということになっている。とすれば、『万葉集』は愛にはじまる歌集である。もっとも、最近では、

——それは、おかしいゾ。ほんとに磐姫の歌かなあ。いつからとなく伝えられた伝承歌が、磐姫伝説に結びついたのではないか。

といわれているのだが。ともあれ伝説に敬意を表して、ここの四首を眺めてみよう。

君が行き日長くなりぬ山尋ね迎へか行かむ待ちにか待たむ

君は来まさず日数経ぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山路を分けて尋ねゆかん
それともひとり待つべきや
千々に乱れるわが心

伝説どおりに、夫の帰りを待ちこがれている磐姫の歌として読んでも、すなおに共感できる。しかし、『万葉集』の時代を溯ること数百年、かなり伝説的存在でもある磐姫に、こんなにすっきりした歌が作れたかどうか。歌じたい、どことなく民謡調だし、口調も洗練されていて、多くの人に歌いつがれているうちに、形が調えられた、という感じが強い。

当時の結婚は、妻訪いという形で行われることが多かった。夫婦とはいうものの、それぞれが自分の実家に住み、夜になると夫が妻の許に訪れる。今ふうにいえば別居結婚である。とすれば、ごくフツーの女がしばらく訪れのない男を待ちかねている歌、誰もが口ずさめる民謡のようなもの、と考えたほうがいいかもしれない。そう思って以下の三首を眺めてみよう。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なましものを

これほどに　思い焦がれているのなら
いっそ深山(みやま)に分けいって
岩を枕に死のうもの

いっそ死んでしまいたい、と嘆くかと思えば、気を取りなおして殊勝になる。

ありつつも君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置くまでに

いえいえこのまま待ちましょう
あなたのお帰り信じつつ
わたしの長い黒髪に
霜の置くまで待ちましょう

「黒髪に霜の置くまで」は男の姿を待ちわびて外に立ちつくし、夜が更けて髪に霜のおくまで、という解釈と、黒髪に白髪がまじるまでとの二説があるが、どちらとも決めかねる。

そしてその最後の一首はこうだ。

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方に我が恋やまむ

秋の田にただよう霧の霽るるはいつぞ
その霧のごと　わが思い胸にたゆたう
いずれの方に霧は流るる
わが恋は　はてなきものを

前の三首よりさらに文学的洗練が加わっているとはいえないだろうか。死ぬとか待つとか言わずに、秋の霧に思いを託している。これなら『万葉集』編纂当時の作としても十分に鑑賞に耐える。それよりさらに三百数十年も古い歌とはどうしても思えない。

しかも、「君が行き」の歌によく似た作品が残っていて、これを別の作者とする伝承もあるのだ。『万葉集』の編者も、「少しヘンだ」と首をかしげ、『古事記』や『日本書紀』を引いて説明しているのだが、ここでは詳細は省略し、すでに『万葉集』時代にも、磐姫が作者であることを疑問視していた、ということだけを紹介しておく。

それにしても、これらの歌が、なぜ磐姫のものとして伝えられたのか。

答えは簡単だ。『古事記』にも『日本書紀』にも、ヤキモチの皇后として描かれているからだ。彼女は、夫の仁徳天皇が別の女性を入れることを許さず、そういう気配があると、「足もあがかに」つまりじだんだ踏んで嫉妬した、と『古事記』にある。仁徳サマは吉備の黒日売という美女を愛したのだが、彼女は皇后のヤキモチを恐れて吉備に逃げ帰ってしまった。

また磐姫は、新嘗祭の折に供えものを盛る器として使う三綱葉を採りに紀国に出かけていった留守に、夫が、異母妹で美貌の八田若郎女との愛欲にふけっていると知ると、激怒して、せっかく集めた柏の葉を、帰りの船の上から全部海に投げすててしまった。

なお『日本書紀』は、磐姫が三綱葉を投げいれたことから、その場所を葉渡というようになった、と伝えている。これについて、歴史学者・直木孝次郎氏は、むしろ、柏渡という地名を説明するために、あとから伝説がくっついたもの、と見ておられる。

では、なぜ柏渡という地名が生まれたのか。直木氏はこれについても興味ある説をしめされた。多分、このあたりで、神を祭る行事として、柏の葉で作った容器に食物を盛り、海に投げいれることがあったのではないか、と。場所は上町台地の西麓に近いところ、後の天満橋の架橋されたあたりではないか、という案を提示しておられる（一九八九年度大阪文化賞受賞記念『古代難波の研究二、三』所収）。いまの天満橋あたりの賑わい

からは、柏渡は想像しにくいかもしれないが、そのあたりに立って眼を閉じ、磐姫伝説を思いうかべるのも、ちょっとした試みではあるまいか。

さて、ヤキモチ・クイーン磐姫はどうしたか。柏の葉を投げすてただけではおさまらず、難波（なにわ）の本拠に帰らず、淀川を溯って山城国へ行ってしまった。

「ゴメン、ゴメン」

仁徳サマは追いかけてゆくが、磐姫は許さない。あちこちの美女にうつつをぬかす仁徳サマに責任はありそうだが、磐姫の取り乱しかたのすさまじさを見ると、ちょっと仁徳サマが気のどくになってくるからふしぎである。

だからといって、

「男は浮気、女はヤキモチ」

「女は強くて、男はゴキゲン取り」

などといってしまっていいものかどうか。三綱葉を投げすてたかどうかはともかく、磐姫サマのヤキモチ伝説は、もう一度検討してみる価値がありそうだ。

仁徳サマの浮気は、当時の王権の伸長を物語化したものだ。征服した相手から、実際に女を召しあげもしたろう。磐姫は葛城（かつらぎ）氏の出身で、当初は仁徳サマの強大な後ろ楯（うしだて）だったが、相対的に地盤は沈下する。

「グヤジーイ！」

と磐姫が叫ぶのもあたりまえだ。歴史家は、葛城氏は大和葛城郡を本拠として四世紀末から五世紀にかけて栄え、天皇家と婚姻関係を重ねたが、後に天皇家と対立、没落したと見ている。磐姫のヤキモチはここに重ねてみるとよくわかる。例の仁徳天皇陵もはたして仁徳サマの陵かどうかも疑問視されているこのごろだが、磐姫のお実家（さと）の解明は進んでいるようだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com